

お手紙

アーノルド・ローベル 著・絵

みき たく やく

がまくんは、げんかんの 前に すわって いました。

かえるくんが やつて 来て、言いました。

「どう したんだい、がまがえるくん。きみ、

かなしそうだね。」

「うん、そうなんだ。」

がまくんが 言いました。

「今、一日の うちの かなしい 時なんだ。つまり、

お手紙を まつ 時間なんだ。そう なると、いつも
ぼく、とても ふしあわせな 気もちになるんだよ。」

「そりや、どう いう わけ。」

かえるくんが たずねました。

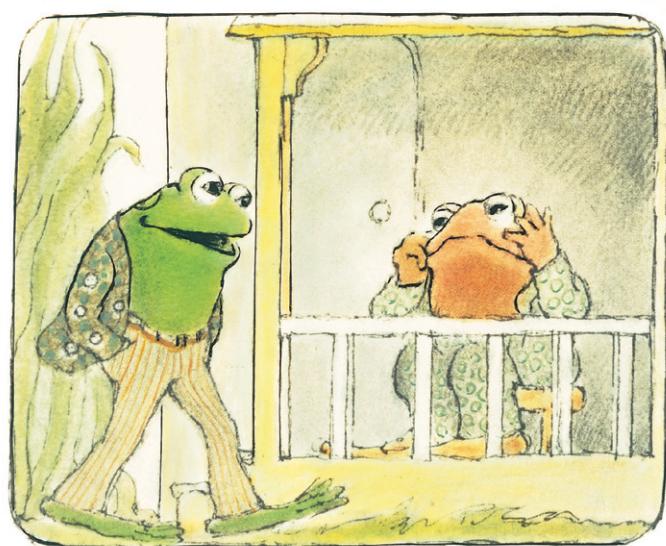
「だつて、ぼく、お手紙 もらった こと

ないんだもの。」

がまくんが 言いました。

「いちどもかい。」

かえるくんが たずねました。



「ああ。いちども。」

がまくんが 言いました。

「だれも、ぼくに お手紙なんか くれた
ことが ないんだ。毎日、ぼくの
ゆうびんうけは、空っぽさ。お手紙を
まつて いる ときが かなしいのは、
その ためなのさ。」

ふたりとも、かなしい 気分で、げんかんの
前に こしを 下ろして いました。

すると、かえるくんが 言いました。

「ぼく、もう 家へ 帰らなくっちゃ、
がまくん。しなくちゃ いけない ことが、
あるんだ。」

かえるくんは、大いそぎで

家へ 帰りました。えんぴつと
紙を 見つけました。紙に 何か
書きました。紙を ふうとうに
入れました。ふうとうに こう
書きました。



「がまがえるくんへ」



かえるくんは、家から とび出しました。

知り合いの かたつむりくんに 会いました。

「かたつむりくん。」

かえるくんが 言いました。

「おねがいだけど、この お手紙を がまくんの
家へ もって いって、ゆうびんうけに
入れて きて くれないかい。」

「まかせて くれよ。」

かたつむりくんが 言いました。

「すぐ やるぜ。」



それから、かえるくんは、がまくんの 家へ

もどりました。

がまくんは、ベッドで お昼ねを して いました。

「がまくん。」

かえるくんが 言いました。

「きみ、おきてさ、お手紙が 来るのを、もう

ちょっと まつて みたら いいと 思うな。」

「いやだよ。」

がまくんが 言いました。

「ぼく、もう まつて いるの、あきあきしたよ。」



かえるくんは、まどから ゆうびんうけを 見ました。

かたつむりくんは、まだ やって 来ません。

「がまくん」

かえるくんが 言いました。

「ひよつと して、だれかが、きみに
お手紙を くれるかも しれないだろう。」

「そんな こと、あるものかい。」

がまくんが 言いました。

「ぼくに お手紙を くれる 人なんて、
いるとは 思えないよ。」

かえるくんは、まどから のぞきました。

かたつむりくんは、まだ やって 来ません。

「でもね、がまくん。」

かえるくんが 言いました。

「きょうは、だれかが、きみに お手紙 くれるかも
しないよ。」

「ばからしい こと、言うなよ。」

がまくんが 言いました。

「今まで、だれも、お手紙 くれなかつたんだぜ。」

きょうだつて 同じだろ？よ。」



かえるくんは、まどから のぞきました。

かたつむりくんは、まだ やって 来ません。

「かえるくん、どうして、きみ、ずっと まどの 外を

見て いるの。」

がまくんが たずねました。

「だつて、今、ぼく、お手紙を まつて いるんだもの。」

かえるくんが 言いました。

「でも、きや しないよ。」

がまくんが 言いました。

「きっと 来るよ。」

かえるくんが 言いました。

「だつて、ぼくが、きみに お手紙 出したんだもの。」

「きみが。」

がまくんが 言いました。

「お手紙に、なんて 書いたの。」

かえるくんが 言いました。

「ぼくは、こう 書いたんだ。」

『親愛なる がまがえるくん。ぼくは、

きみが ぼくの 親友で ある

ことを、うれしく 思つて います。』



きみの 親友、かえる。』

「ああ。」

がまくんが 言いました。

「とても いい お手紙だ。」

それから、ふたりは、

げんかんに 出て、お手紙の
来るのを まつて いました。

ふたりとも、とても
しあわせな 気もちで、そこに
すわって いました。

長い こと まつて いました。

四日 たつて、

かたつむりくんが、がまくんの

家に つきました。

そして、かえるくんからの

お手紙を、がまくんに

わたしました。

お手紙を もらつて、

がまくんは、とても

よろこびました。

アーノルド＝
ローベルさんは、
「ふくろうくん」
「どろんこ」
「こぶた」なども
書いて います。



馬の おもちゃの 作り方

みやもとえつよし文

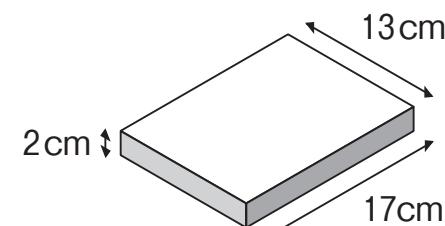
みの回りにある、食べものやおかしの空きばこをつかうと、いろいろなおもちゃを作ることができます。

ここでは、すこしのしかけで、楽しいうごきをする、馬のおもちゃの作り方をせつめいします。



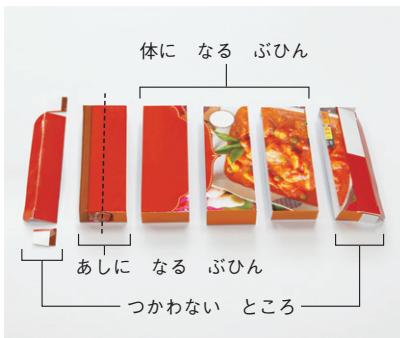
〈作り方〉

- まず、馬の体やあしになるぶひんを作ります。
空きばこから、四センチメートルずつ四つ切り出しましょう。そのうちの三つが、馬の体になります。のこった一つは、半分に切り分けましょう。
- （下の図ぐらいの大ささのもの）
- ・色画用紙・モノサシ
- ・はさみ・ホチキス・のり



〈作り方〉

- まずは、馬の体やあしになるぶひんを作ります。
- 空きばこから、四センチメートルずつ四つ切り出しましょう。そのうちの三つが、馬の体になります。のこった一つは、半分に切り分けましょう。
- これは、馬のあしになります。





つぎに、馬の 体を 作ります。体の ぶひんの うちの一つを よこむきに おきます。これが、馬の おなかになります。もう 一つを たてに して、はしを合わせて おなかの 上に おきます。これが、馬の首になります。おなかと 首が かさなつた ところを、ホチキスで とめます。のこった もう 一つは、

よこに して おなかの 上に おきます。これが、馬のせなかに なります。せなかは、おなかと 首に、ホチキスでとめます。これで、馬の 体が できました。

それから、馬の あしを 作ります。一つの あしのぶひんから、十二センチメートルの 細長い 四角形を二つ 切り出します。四つ できたら、それぞれ

かたほうの はしを ニセンチメートル おりまげます。その後、しゃしんのように、おりまげた ところを おなかに とめます。
さいごに、顔を 作ります。色画用紙を、たて 九センチメートル、よこ 四センチメートルの 形に 切ります。目や はなをつけたら、首の 上に はり、耳を つけます。

これで、馬の おもちゃの できあがりです。たてがみや しっぽをつけたり、すきな 色の 画用紙を はつたり しても いいですね。

〈楽しみ方〉

おなかを もち、せなかを おしたり ひいたり すると、首が大きく うごきます。この うごき方を いかして、ほかのどうぶつを 作って みても いいですね。

 聞いて 楽しもう

先生に 読んで もらって、むかし話を
楽しみましょう。

せかい一の話 きたしょうすけ文

やまふく あけみ 絵



▼いちばん おもしろいと 思った ところは
どこですか。友だちと 話しましょう。

 142ページ

「——が、——する ところです。」
こんな 言い方を つかって
みましょう。

わたしは おねえさん

いしい むつみ 作
くろい けん 絵

歌を 作るのが すきな すみれちゃんが、また 一つ、
歌を作りました。こんな 歌です。

わたしは おねえさん
やさしい おねえさん

元気な おねえさん
ちっちゃな かりんの おねえさん
一年生の 子の おねえさん
すごいですよ



「おねえさんって、ちょっとぴり えらくて やさしくて、
がんばる もので、ああ、二年生に なつて しあわせ。」

この 歌を 歌う たびに、すみれちゃんは そう
思いました。

けさも、この歌を歌つています。

十月の日曜日の、気もちよく晴れた朝でした。

そんな朝にこの歌を歌うと、お天気も、すみれちゃんの気もちも、もっとピカピカとかがやくように、すみれちゃんには思えるのでした。そして、えらいおねえさんになつて、りっぱなことをしたくなりました。

「そうだ。」

と、すみれちゃんは言いました。

それから心の中で、「えらいおねえさんは、朝の



うちにしゅくだいをするんだわ」と言いました。

同じことをおかあさんに言われると、あまりいい気もちはしません。けれど、自分から思つたときは、すごくいい気もちです。すみれちゃんには、それがふしぎでした。

すみれちゃんは、つくえの上に、教科書を広げました。ノートも広げました。

でも、しゅくだいをはじめようとしたら、外が気になつてきました。すみれちゃんのつくえのすぐよこには、まどがあつて、花だんが見えます。花だんには、

春に たねを まいた コスモスが、いちめんに
さいて いました。

ときどき 風が ふいて、コスモスの 花が、いつせいに
ゆれます。その ようすは、コスモスが みんなで
歌を 歌つて いるようです。

コスモスさん

コスモスさんも 歌つてる

ゆらゆら ゆらゆら 歌つてる

お日さまが うれしいって 歌つてる

お水が ほしいって 歌つてる



すみれちゃんの 口から、しぜんと そんな 歌が 出て
きました。

「そうだ、コスモスに お水を やらなくちゃ。」
と、すみれちゃんは 言いました。そして、にわに 出て、
じょうろで 水やりを しました。

さて、その間に、すみれちゃんのへやは
ちょっとしたことがおきていました。

出しつぱなしのすみれちゃんのノートに、ニさいになつた妹のかりんちゃんが、えんぴつで、何かをかきはじめたのです。

すみれちゃんが水やりからもどつてくると、
かりんちゃんは、まだかいているさいちゅうでした。
すみれちゃんはおどろいて、
「かりん、何してるので？」

と、ききました。

「おべんきょ」

と、かりんちゃんが言いました。

「もう、かりんたら、もう。」

と、すみれちゃんは言いました。

半分ぐらい、なきそうでした。

もう半分は、おこりそうでした。

すみれちゃんには、自分がなきたいのかおこりたいのか分かりませんでした。それで、じつとノートを見ていました。かりんちゃんがかいた



ぐちゃぐちゃの ものを 見て いました。

「何よ、これ。」

と、すみれちゃんは 言いました。

すみれちゃんは、それが 何か、知りたかった
わけでは ありませんでした。けれど、かりんちゃんは、

「お花。」

と 答えました。

「お花。これが お花なの。」

そう 言うと、すみれちゃんは、かりんちゃんを見ました。かりんちゃんは、「そう。」と 言うように

うなずきました。それから、まどの 外を
ゆびさして、もう いちど、

「お花。」

と 言いました。

そこには、すみれちゃんが 水を やつたばかりの
コスモスが さいて います。

すみれちゃんは、

もう いちど、

ノートを 見ました。

じつと。ずっと。



「あはは。」

すみれちゃんは わらいだしました。コスモスなんか
ちつとも 見えない ぐちやぐちやの 絵が、かわいく
見えて きたのです。

「あはは。」

と、かりんちゃんも わらいだしました。

それから、ふたりで たくさん わらつて わらつて、
わらいおわると、すみれちゃんは 言いました。
「じゃあ、かりん。こんどは ねえねが
おべんきょうするから、ちょっと どいてね。」

いしいむつみさんは、
「わたしちゃん」
「つくえの下の
とおい国」なども
書いて います。

「いいよ。」

かりんちゃんが いすから 下りて、
その いすに すみれちゃんが
すわりました。

すみれちゃんは、ふでばこから
けしゴムを 出して、かりんちゃんが
かいた 絵を けそと しました。

けしかけて、でも けすのを

やめて、すみれちゃんは、つぎの

ページを ひらきました。



おにごっこ

もりした はるみ 文

かわむら おさむ 絵

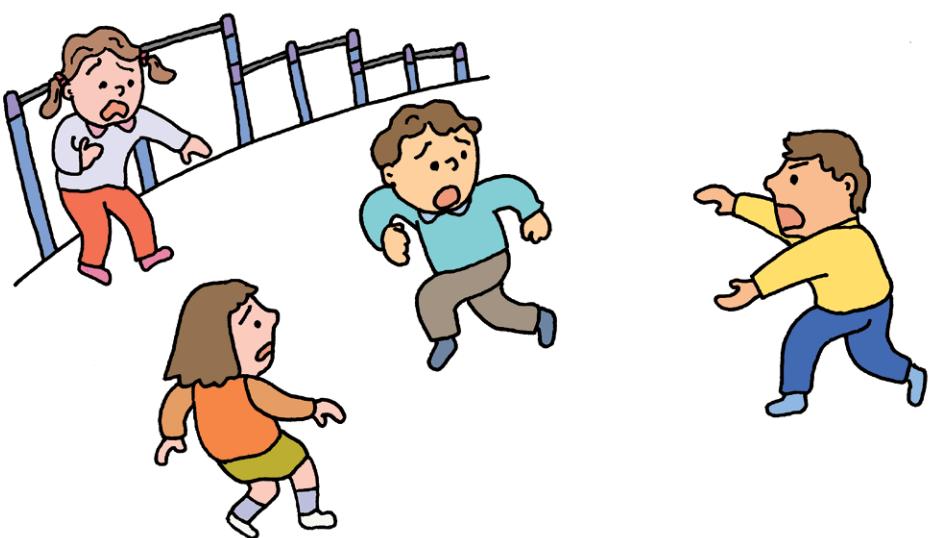
おにごっこは、どうぐがなくとも、みんなでできる遊びです。おにごっこには、さまざまあそび方があります。

どんなあそび方があるのでしょうか。なぜ、そのようなあそび方をするのでしょうか。

あそび方の一つに、「てつぼうより むこうに にげてはだめ」など、にげてはいけないところをきめるものがあります。にげる人が、どこへでも行くことができたら、おには、

つかまえるのがたいへんです。同じ人が、ずっと、おにをすることになるかもしれません。にげてはいけないところをきめることで、おには、にげる人をつかまえやすくなります。

また、「じめんに かいた 丸の中 いれば、つかまらない」「木に さわって いれば、つかまらない」のように、にげる人だけが入れるところを作ったり、つかまらないときをきめたりするあそび方もあります。



にげる 人は みんな、すぐに つかまつてしまします。このように きめる ことで、にげる 人が かんたんには つかまらないようになります。そして、つかれた 人も、走るのがにがてな 人も、すぐには つかまらずに、あそぶ ことが できます。

ほかに、「おにが 交代交代せずに、つかまつた人が、みんな おにに なつて おいかける」という あそび方も あります。この あそび方だと、おにの 数が ふえて いくので、おには、にげる 人を つかまえやすく なります。また、

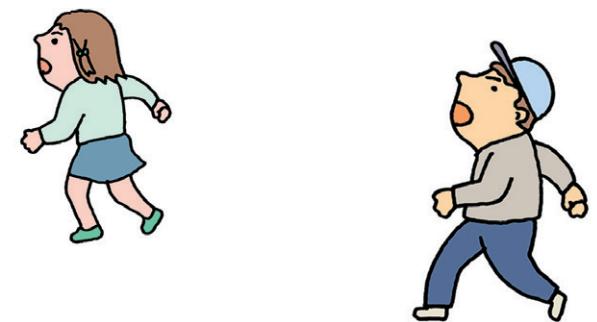
にげる 人は、おにが ひとりの ときより、にげる ところを くふうしたり、じょうずに 走つたりしなければ なりません。「つかまりそ^うだ」と、どきどき する ことも ふえて、

おにごっこが、もつと おもしろく なります。ところが、この あそび方は、どきどきして 楽しいけれど、おにごっこが すぐに終わって しまいます。そこで、おにが ふえても、にげる 人を つかまえにくく することがあります。「おにになつた 人は、みんな手を つないで おいかける」と きめるのです。



おにが 三人、四人と ふえて くると、手を
つなぎながら おいかけるのは、たいへんです。
でも、この あそび方だと、手を つないだ
おにには、力を 合わせて おいかけると いう
楽しさが くわわります。また、にげる 人は、
おにが ふえるに つれて、つかまりにくく
なります。きまりを つけ足すだけで、
おにごっこが すぐに おわらすに、長く
あそびつづける ことが できます。

このように、おにごっこには、さまざまな
あそび方が あります。おにに なつた 人も、
おにごっこが いいですね。



にげる 人も、みんなが 楽しめるように、
くふうされて きたのです。あそぶ ところや
なかまの ことを 考えて きまりを
作れば、自分たちに 合った おにごっこに
する ことも できます。その ときには、
みんなで きまりを きめて、それを
まもるようになります。あそびおわった
ときには、だれもが 「楽しかった」と
思えるような おにごっこが
できること いいですね。

スーホの白い馬

おおつか ゆうぞう 作

リーウーリー・シアン 絵

中国の北の方、モンゴルには、広い草原が広がっています。そこにすむ人々は、むかしから、ひつじや牛や馬などをかつて、くらしていました。

このモンゴルに、馬頭琴というがつきがあります。がつきのいちばん上が、馬の頭の形をしているので、馬頭琴というのです。いつたい、どうして、こういうがつきができるのでしょうか。それには、こんな話があるのです。



むかし、モンゴルの草原に、スーホと いう、まことに、ひつじかいの少年がいました。

スーホは、年とったおばあさんと ふたりきりで、くらして いました。スーホは、おとなに まけないくらい、よく はたらきました。毎朝、早くおきると、スーホは、おばあさんを たすけて、ごはんの したくを します。それから、二十頭あまりの ひつじを おって、広い 広い 草原に 出ていきました。

スーホは、とても 歌が うまく、ほかの ひつじかいたちに たのまれて、よく 歌を 歌いました。スーhoの うつくしい 歌声は、草原を こえ、遠くまで ひびいて いくのでした。

ある 日のことでした。日は、もう 遠い 山の むこうに しづみ、あたりは、ぐんぐん くらく なつて くるのに、スーhoが 帰つて きません。

おばあさんは、しんぱいに なつて きました。

近くに すむ ひつじかいたちも、

どう したのだろうと、さわぎはじめました。

みんなが しんぱいで たまらなく なつた
ころ、スーhoが、何か 白い ものを
だきかかえて、帰つて きました。

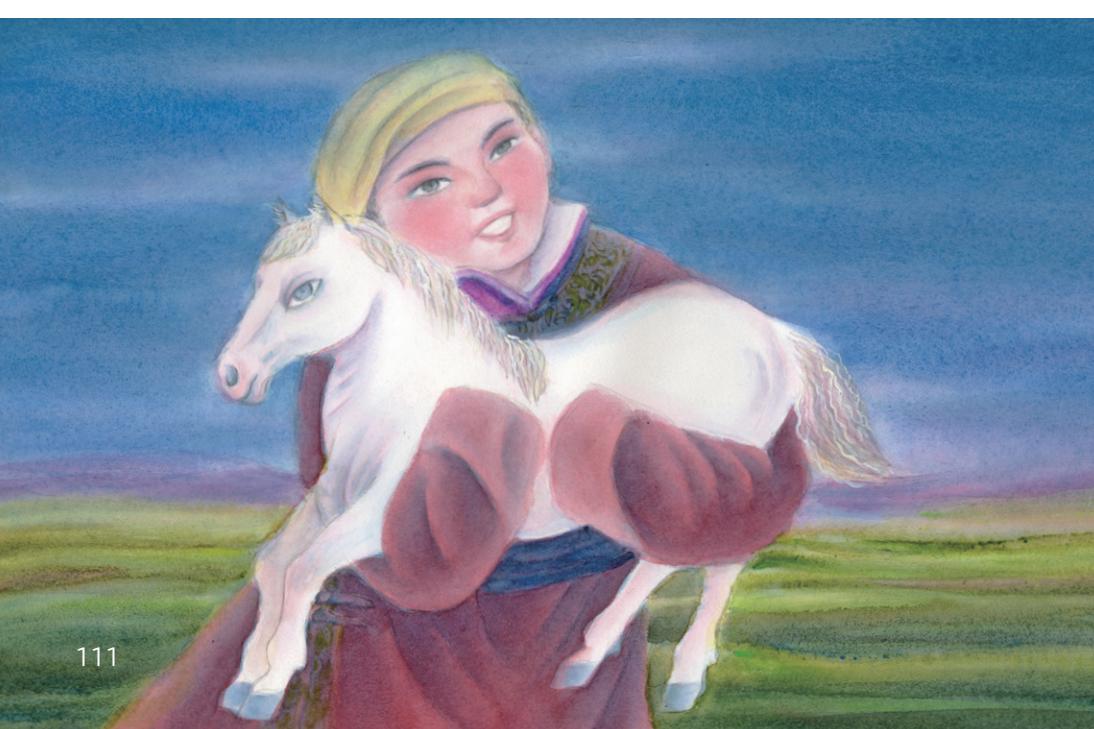
みんなが そばに かけよつて みると、それは、
生まれたばかりの、小さな 白い 馬でした。

スーhoは、にこにこ しながら、

みんなに わけを 話しました。

「帰る とちゅうで、子馬を 見つけたんだ。

これが、じめんに たおれて、もがいて



いたんだよ。あたりを見ても、もちぬしらしい人もいないし、

おかあさん馬も見えない。ほうっておいたら、夜になつて、おおかみに食われてしまうかもしない。それで、つれてきたんだよ。」

日は、一日一日とすぎていきました。スーホが、心をこめてせわしたおかげで、子馬は、すくすくとそだちました。体は雪のように白く、きりつと引きしまつて、だれでも思わず見とれるほどでした。

あるばんのこと、ねむつていたスーホは、はつと目をさました。けたたましい馬の鳴き声と、ひつじのかこいのそばにかけつけました。はねおきると外にとび出し、ひつじのかこいのそばにかけつけました。見ると、大きなおおかみが、ひつじにとびかかろうとしています。そして、わかい白馬しろうまが、おおかみの前に立ちふさがつて、ひつしにふせいでいました。

スーホは、おおかみをおいはらつて、白馬のそばにかけりました。白馬は、体中あせびつしょりでした。きっと、ずいぶん長い間、おおかみとたたかつていたのでしょうか。

スーホは、あせまみれになつた白馬の体をなでながら、兄弟に言うように話しかけました。

「よくやつてくれたね、白馬。本当に

ありがとう。これから先、どんなときでも、ぼくはおまえといっしょだよ。」

月日は、とぶようにすぎていました。

ある年の春、草原いつたいに、知らせがつたわつてきました。このあたりをおさめている



とのさまが、町で けい馬の 大会を ひらくと いうのです。そして、一等に
なった ものは、とのさまの むすめと けつこんさせると いうのでした。

この 知らせを 聞くと、なかまの ひつじかいたちは、スーホに

すすめました。

「ぜひ、白馬に のって、けい馬に 出てごらん。」

そこで スーhoは、白馬に またがり、ひろびろと した 草原を こえて、
けい馬の ひらかれる 町へ むかいました。

けい馬が はじまりました。たくましい わかものたちは、いつせいに
かわの むちを ふりました。馬は、とぶように かけます。でも、先頭を
走つて いくのは、白馬です。
スーhoの のつた 白馬です。

「白い 馬が 一等だぞ。白い 馬の

のり手を つれて まいれ。」

とのさまは さけびました。

ところが、つれて こられた 少年を

見ると、まずい みなりの ひつじかいでは
ありませんか。そこで、とのさまは、むすめの
むこに すると いう やくそくなどは、
知らんふりをして 言いました。

「おまえには、ぎんかを 三まい

くれて やる。その 白い 馬を

ここに おいて、さつさと 帰れ。」

スーhoは、かつと なって、

むちゅうで 言いかえしました。



「わたしは、けい馬に 来たのです。馬を 売りに
来たのでは ありません。」

「なんだと、ただの ひつじかいが、この わしに
さからうのか。ものども、こいつを うちのめせ。」
とのさまが、どなり立てる。家来たちが、
いつせいに、スーホに とびかかりました。スーホは、
おおぜいに なぐられ、けどばされて、氣を
うしなつて しまいました。

とのさまは、白馬を とり上げると、家来たちを
引きつれて、大いばりで 帰つて いきました。

スーホは、友だちに たすけられて、やつと
うちまで 帰りました。

スーホの 体は、きずや あざだらげでした。おばあさんが、つきつきりで
手当てを してくれました。おかげで、何日か たつと、きずも やつと
なおつて きました。それでも、白馬を とられた かなしみは、どうしても
きえません。白馬はどうして いるだろうと、スーhoは、
そればかり 考えて いました。白馬は、どう なつたのでしょうか。

すばらしい 馬を 手に入れた とのさまは、まったく いい 気もちでした。

そこで、ある 日のこと、とのさまは、おきやくを たくさん よんて、
さかもりを しました。その さいちゅうに、とのさまは、白馬に のつて、
みんなに 見せて やることに しました。

家来たちが、白馬を 引いて きました。とのさまは、白馬に
またがりました。



そのときです。白馬は、おそろしい

いきおいで はね上がりました。

とのさまは、じめんに ころげおちました。

白馬は、とのさまの 手から

たづなを ふりはなすと、さわぎ立てる

みんなの 間を 紬けて、

風のように かけだしました。

とのさまは、おき上がろうと

もがきながら、大声で

どなりちらしました。

「早く、あいつを つかまえろ。

つかまらないなら、弓で



いこうして しまえ」

家来たちは、いっせいに おいかけました。

けれども、白馬には とても

おいつけません。家来たちは、

弓を 引きしぶり、いっせいに 矢を

はなちました。矢は、うなりを 立てて とびました。白馬の せには、

つぎつぎに、矢が ささりました。それでも、白馬は 走りつづけました。

その ばんのことです。スーホが ねようとして いた とき、ふいに、外の方で 音が しました。

「だれだ。」

ときいても へんじは なく、カタカタ、カタカタと、もの音が つづいて います。ようすを 見に 出て いった おばあさんが、さけび声を 上げました。

「白馬だよ。うちの 白馬だよ。」

スーホは はねおきて、かけて いきました。

見ると、本当に、白馬は そこに いました。

けれど、その 体には、矢が 何本も つきさり、あせが、たきのように ながれおちて います。白馬は、ひどい きずを うけながら、走って、走つて、走りつづけて、大すきな スーhoのところへ 帰つて きたのです。

スーhoは、はを 食いしばりながら、白馬にささつて いる 矢を ぬきました。きず口からは、血ちが ふき出しました。

「白馬、ぼくの 白馬、しないで おくれ。」

でも、白馬は、弱りはてて いました。いきは、だんだん 細くなり、目の 光も きえて いきました。

そして、つぎの 日、白馬は、しんで しまいました。
かなしさと くやしさで、スーhoは、いくばんも ねむれませんでした。でも、やつと ある ばん、とろとろと ねむりこんだ とき、スーhoは、白馬の ゆめを 見ました。スーhoが なでて やると、白馬は、体をすりよせました。そして、やさしく スーhoに 話しかけました。

「そんなに かなしまないで ください。それより、わたしの ほねや かわや、すじや 毛を つかって、がつきを 作つて ください。」

そう すれば、わたしは、いつまでも あなたの そばに いられますから。」

スーhoは、ゆめから さめると、すぐ、その がつきを 作りはじめました。ゆめで、白馬が 教えて くれた とおりに、ほねや かわや、すじや 毛を、



むちゅうで 組み立てて いきました。

がつきは できあがりました。これが 馬頭琴です。

スーホは、どこへ 行く ときも、この 馬頭琴を もつて いきました。

それを ひく たびに、スーhoは、白馬を ころされた くやしさや、白馬に
のつて 草原を かけ回った 楽しさを 思い出しました。そして、スーhoは、
自分の すぐ わきに 白馬が いるような 気が しました。そんな とき、
がつきの 音は、ますます うつくしく ひびき、聞く 人の 心を
ゆりうごかすのでした。

やがて、スーhoの 作り出した 馬頭琴は、広い モンゴルの
草原中に 広まりました。そして、ひつじかいたちは、夕方に
なると、よりあつまつて、その うつくしい 音に 耳を すまし、
一日の つかれを わずれるのでした。

おおつかゆうぞうさんは、
「おつかゆうぞうさん」などが
あります。
日本語にして
書いて います。
「長くつ下のピッピ
「小さな
スプーンおばさん」などが



